

# 家畜と人間社会

竹中 千春

## I. 研究課題

地域研究と学際研究を基軸にした国際学の新たな展開として、それぞれ政治学・歴史学・地理学・生物学・比較文学という異なる学問領域を専攻する専門家が集い、共通テーマ「家畜と人間社会」を切り口に、従来とは異なる分析を試みようとしたプロジェクトである。

研究上の意義としては以下のようなことを考えた。

- 1) 国際学のあり方を考えながら共同研究を行い、国際学自体の内容を検討していく。
- 2) 「地域研究」として、すでに区切られている「東欧」とか「南アジア」という「地域」に拘束されずに、広大なイスラム圏と隣接する地域としての歴史を持ったハンガリーやインドという「地域」についての新たな位置づけや、家畜を重要な社会的資源とする農村性をもった「地域」という位置づけを試みる。それによって、「地域研究」自体の再定義に挑戦する。
- 3) 先住民問題や環境問題など、今日の新しい課題は、西欧近代的な人間中心主義の偏りに発しているとも言える。政治学・歴史学・地理学・生物学・比較文学も、そうした学問体系の一つである。改めてこの人間中心主義を批判する視座として、動物という思いがけない観点を挿入して、学問のあり方自体を問い直す契機を探す。

## II. 研究経過

キーワード「家畜」については、研究分担者の戸谷は、すでにハンガリー史とヨーロッパ地域の史実の中における羊・馬・牛についての研究を進めてきた実績を持っており、その点で他の分担者は学ぶ点が多かった。戸谷は、今回の共同研究を機会に、これまでの自分の研究を基礎に、より大きな時間的・地理的な広がりの中で、ヨーロッパ世界とアジア・イスラム世界との交流史として「家畜と人間社会」を描き出すことを試みた。

森本は、「家畜」を中心的な焦点にしてはこなかったとはいえ、ヒマラヤ地方のネパールをフィールドに人類学的な研究を実施してきた経験を持っている。ネパールの農村社会では、「家畜」は生産労働と食糧の面で不可欠な存在だが、ツーリズムを中心とする町においても、同様である。この地域では、宗教的・文化的に動物は人間社会にとって欠かすことの出来ない存在といえる。地理学の新たな展開として、「家畜と人間社会」から見たネパール像を書くことを課題とした。

竹中が専門とする政治学においては、歴史学や地理学と異なって「家畜と人間社会」といったテーマ自体が、大変に珍しい。けれども、政治的な現象の具体的な場面においては、近現代においても動物が重要な鍵となることがある。そこで、ヒンドゥーとムスリムの宗教的な暴動についてのこれまでの研究をもとに、「家畜と人間社会」の一側面として、「神」あるいは「穢れ」として動物が宗教的・

文化的に位置づけられ、それが政治紛争に利用される点に焦点を置いて分析を試みた。こうした視点と関連して、ジェンダーおよび人口の視点からのインド社会の分析をまずまとめた。

新しい分担者として2年目以降に加わったのが、生物学を専攻する橋本肇教授と比較文学と東アジア地域研究を専攻する竹尾茂樹教授である。橋本は、自然科学的な分野からの「家畜と人間社会」への考察を担当し、日本における衣・食・住環境におけるEM技術の導入、家畜の糞尿処理への応用、実験動物の床敷き基材（大部分が再生紙）及び糞尿への利用可能性について検討した。竹尾は、農業と食文化の視点から日本と沖縄における山羊の飼育についてフィールドワークを含めて情報収集にあたり、ユニークな考察を行い、日本社会を新しい観点から解釈することに貢献した。

以下では、それぞれの調査を基盤とした現時点での成果を公表したい。

### III. 研究成果

#### 1. 戸谷 浩：「家畜」を通して瞥見したハンガリー上部地方

筆者はこれまで、様々な家畜を視座としながら、ハンガリー社会と周辺社会（文化圏）との結び付きを研究の対象としてきた。最初に試みたのが、肉牛の交易を通じたハンガリー社会と西欧社会との結び付きの研究であった。そこから明らかになったのは、近世期の西欧社会の「食」の一つの基礎を担っていたのがハンガリーであったという事実であった。最盛期で年に20万頭に上るハンガリーからの肉牛の輸出頭数が、その事実を裏付けている。そして、この肉牛輸出は、生きたままの肉牛を西欧へと追ってゆく人々を必要とし、結果として、移動生活に慣れ、野盗や獣から我が身と肉牛を守るために武装を余儀なくされた社会集団（ハイドゥー hajdúk）を生み出した。彼らは、ハンガリー史の中では決して看過することの許されない社会的存在となつてゆき、自らの境遇を嘆く農民や牧夫はハイドゥーとなる道を目指し、ハイドゥーたちの有する軍事力は戦乱の近世ハンガリーにおいて大いに重用されることとなった。

筆者が次に取り組んだのが、羊を視座としたハンガリー社会とバルカン（ないしはオスマン）社会の関係についてであった。1989年の体制転換以降のヨーロッパ回帰指向に止まらず、ハンガリー社会が自らをヨーロッパの一部と位置づけ、その境界の向こう側の世界（時にバルカン社会であり、ロシア社会であり、時にルーマニア社会であり、オスマン社会ある）を自らとは相容れない他者として切り離そうとする発想は、ハンガリー史においては常に見出される思考様式である。筆者は、このハンガリー史に強く染みついた発想を、ハンガリー社会とバルカン社会に共通して、重要な要素である羊に着目しながら指弾し、少なくとも日常生活、民衆文化のレベルにおいては、この二つの社会の間に境界線を引くことの無益さ、ハンガリー社会が南に向かって開かれていることを強調した。第一次世界大戦前までは、多くの羊を連れた羊飼いたちが、夏にはセルビアやルーマニアの山を目指し、冬には寒さを逃れるためにハンガリーの平野部に冬営地を求めて山を下りてきていた。ハンガリーと他者を区切っている、国境線という象徴的な境界を、かつては羊たちが悠々と飛び越えていたのである。

筆者の家畜への執着は続き、次いで馬、特に白馬に注目した。ただ、このテーマはハンガリー社会と周辺の社会との結び付きという観点からは異質で、白馬を通じた戦前のハンガリーと日本のあまり知られることのなかった関係を詳らかにした。具体的に言えば、その関係とは、昭和天皇が愛用し

ていた御料馬「吹雪」と「白雪」は実は、ハンガリーの産（正確にはオーストリア＝ハンガリー二重君主国の産）であったという事実を明らかにした。この研究においては、さらにハンガリーのホルテイと昭和天皇の築いた権威主義体制の類似性や、白馬に跨がる指導者のイメージ形成の問題なども扱ったが、上に触れたようにハンガリーと周辺社会との関係という枠組みからは外れるので、ここでは詳論することは避けたい。

逆に家畜を仲立ちとはしていないが、ハンガリー社会とハンガリーから見て東方に位置する社会との関係というテーマで言うならば、「最も東に住むハンガリー人」として有名なチャーンゴー人を扱ったことがある。これも家畜が特に問題とされた訳ではないので、ここでその内容に立ち入ることはしないが、ハンガリー本土とハンガリーの東方に位置するモルドヴァ（ルーマニア）の関係が問題の背景にあり、方位としての東が語られたことだけを確認しておきたい。

こうして筆者の拙い研究の軌跡を追ってみると、ハンガリー本土から見て、北の方位だけがまだ取り上げられてきていないことに気付かされる。そこで本共同研究プロジェクト「家畜と人間社会」において筆者は、ハンガリー上部地方（旧ハンガリー王国北部地域、現スロヴァキア）の生活・文化の一端を、家畜を通して眺めることを課題に据えることとした。

最初に取り組んだのが、スロヴァキア南西部の都市エールシェクウーイヴァール（Érsekújvár, スロヴァキア名 ノヴェー・ザームキ Nové Zámky）における、長靴職人（徒弟）の「雄鶏の首はね」の慣習についてであった。この慣習は、カーニヴァルの時期に、町の中心広場で「滑稽裁判」が執り行われ、一夫多妻、善意の人々への攻撃、早朝の鳴き声などを罪状として、雄鶏に死刑が宣告される。雄鶏はその場で斧で斬首され、鶏自体は捌いて、料理してもらうために、雄鶏を提供した親方の家に持ち込まれる。そして、鶏料理が出来上がるのを待つ間、若者たちは小宴会を持ち、盛り上がるのである。

この長靴職人たちの慣習は、ヨーロッパ社会の「滑稽裁判」の流れの中にあるものであることや、カーニヴァルというハレの日における徒弟たちの日頃の憂さを晴らすための仕掛けに満ちていることは容易に見て取れる。ユーモア溢れる雄鶏への罪状や、徒弟たちが鶏を料理してもらうために戻る親方の家には、年頃の娘がいることが多かったといった事実が、上の推測の妥当性を裏付ける。さらに深読みをすれば、首をはねられる雄鶏自身が本当は、親方の分身に他ならないのかもしれない。

ただ、この興味深い慣習については、これ以上詳しい情報は得られなかった。例えば、この慣習は、どれほどの広がりを持つ慣習なのか、エールシェクウーイヴァールに固有の慣習なのかとか、長靴製造業と雄鶏の結び付きには何か理由があるのかとか、慣習が行われ始めた時代はいつかなど明らかにしてみたい疑問は多々あったが、どれも確たる解答は見出しえなかった。

同時に、スロヴァキア地域に関しては、別のテーマで取り組んでいるコマーロム（Komárom, スロヴァキア名 コマルノ Komárno）の諸条例を一つの例として、そこで家畜という存在がどのように書き表されているかも精査してみた。コマーロム市は北から流れるヴァーグ川がドナウ川に流れ込む場所に位置し、上部地方への玄関口のような場を占めている都市である。なお条例は、『ハンガリー地方条例集 第4巻第2分冊』（Kolozsvári Sándor/Óvári Kelemen (összegy.), *Corpus Statutorum* IV/2, Bp., 1897) を典拠とした。

例えば、1682年のコマーロム市の条例には、次のような記述がある。

「…いかなる種類の肉牛も、ましてや群れで通行している羊も、前記の市の牧場において飼養することは何人においても認められない。だが、それらが特に誰かの自家需要や資産に属する肉牛である場合には、群れは通常、牧夫の統率下にある群れとして追い立てられなくてはならない。他方、羊の群れを自由に飼養することは、全く許されていない。同じく、豚の群れも、個々の牧夫が統率する一つの群れでのみ放牧されていた。…」(『条例集』, 299 頁)

家畜に関する言及は、1695 年の条例にも見出される。

1. コマーロムの肉屋は、100 ターレルの罰金の下、良質で十分な肉を捌かねばならない。
2. 市の需要に応じて当地にて解体する名目で、ある種の肉牛が購入されるものの、最良の肉牛はどこか別の場所に追われてゆく。もしそうした肉牛が密輸されることが明らかとなった場合は、よく警戒すべきである。そうした肉牛には、関税官も通関証を与えないであろう。」(『条例集』, 331 頁)

他にもいくつかの条例において、家畜への言及が見られるが、どれも上記のような飼養や交易に関する一般的な内容であって、ハンガリー中央と北部の関係を、特に特徴的に規定するようなトピックは、残念ながら見出しえなかった。

「雄鶏の首はね」の慣習と、コマーロムの僅かな事例をもって結論を導くのは早計であろうが、家畜をキーワードとしてハンガリー上部地方のハンガリー文化を語ることは容易ではなさそうである。それは、山がちな上部地方にあって、有力な家畜と言えば、羊が群を抜いている上に、その羊の飼養を生業としているのは、この地域では、歴史的・文化的に、スロヴァキア人であることが常識とされているからである。ハンガリー上部地方において、ハンガリー社会・文化の中の家畜を何か特徴的に語ろうとすることの難しさは、こういった所に起因するのかもしれない。

## 参考文献

- 戸谷浩「ハイドゥー研究における『断絶』と『不整合』——近世ハンガリーにおける社会集団ハイドゥーへの“定説”を踏まえて」『史潮』新 29 号, 1991 年 6 月
- 「ハンガリーにおけるハイドゥー研究：その展望と課題——ナジとダーヴィドゥの二論文の比較を通して」国際基督教大学『社会科学ジャーナル』第 30 号(3), 1992 年 3 月
- 「近世ハンガリーの市場町社会——羊に纏わる風景を視座として」『スラブ研究』第 43 号, 1996 年 3 月
- 『ハンガリーの市場町——羊を通して眺めた近世の社会と文化』彩流社, 1998 年
- 「提督の白い馬・天皇の白い馬——戦間期の日本＝ハンガリー関係史の一断章」『明治学院論叢』第 621 号「総合科学研究」第 60 号, 1999 年 1 月
- 「大平原の牧夫・家畜・『民衆文化』——社会を“つなぐ”もの、“切り離す”もの」羽場久混子編『ハンガリーを知るための 47 章——ドナウの宝石』明石書店, 2002 年
- 「『チャーゴナー』研究のアポリア」国際基督教大学アジア文化研究所『アジア文化研究別冊 11 都市と平和』, 2002 年 9 月
- 「提督の白い馬・天皇の白い馬」再論『明治学院論叢』第 629 号「総合科学研究」第 69 号, 2003 年 3 月
- 「家畜と方位——ハンガリー近世史への私的アプローチとして」明治学院大学国際学部付属研究所『研究所年報』第 7 号, 2004 年 12 月

## 2. 森本 泉：ネパールにおける動物と人間社会

「家畜と人間社会」に関連して二つの視点からネパールに関する報告を行う。まず、人々の生活を規制する法（ムルキ・アイン Muluki Ain）から動物と人間社会の関係を考察し、次に、世界で唯一の「ヒンドゥー王国」であったネパールにおいて牛をめぐる人間社会を考察することにする。

### (1) Muluki Ain（国の法）における動物と人間社会

ネパールの国の法であるムルキ・アイン Muluki Ain は 1854 年に成立した。その背景に近代国家ネパールの成立がある。その過程を概略すると、1768-1769 年にプリトビ・ナラヤン・シャハ王がカトマンドゥ盆地征服し、1814-1816 年に英東インド会社との戦争に敗れて領土がほぼ半減し、国境がほぼ確定されていき、今日のネパールの輪郭が確定されていった。国境線で閉じられた空間が創出された頃、1846 年から 100 年以上にわたってラナ家による専制時代（1846-1951）が続き、国内でヒンドゥー化が進められることになる。

ラナ専制時代に入って定められた Muluki Ain の特色は、ゴルカ王朝初の包括的法典であり、そこにはネパール独自の「伝統的」法律、慣習が細かく定められていた。この法によって、ネパールに居住する全ての人間を単一のカースト的ヒエラルキーの中に位置づけられ、これに基づいて刑罰などが決定されることになった。中でも、食物や水の授受、性的関係を持つことの是非等についての規定が多い。この中で動物に関することでヒンドゥー的な特徴として挙げられるのは、牛に対する特別な保護であろう。また、ペルシャ・アラビア語系の単語の使用（cf. muluk : アラビア語 ain : ペルシャ語起源）がみられることから、ムガールの影響がうかがえる。他方、勇将として知られた Janga Bahadur がヒンドゥスタンの外へ出て洋行（1850-1851）したことから、西洋の影響も看過できない。

### Muluki Ain の内容

Muluki Ain の内容を列挙すると次のようなものになる。

土地制度、債権、相続と養子、通貨・度量衡・職業活動、裁判手続き及び制裁の実施、刑罰的規定、家の建築、葬儀、信用貸し、公衆衛生、奴隷制と一時的奴隷状態、穢れと贖罪行為、孤児及び不具者、出産と死、親族姻族間での挨拶、婚姻、性交、近親相姦、囚人、売春婦、奴隷との性的関係、婦女暴行、姦通及び離婚、異ジャート間の性的関係

これらの項目がジャートごとにこと細かに定められ、あるジャートと別のジャートの関係、男女の関係を規定していくことになる。

### 1965 年新 Muluki Ain 成立の背景

1951 年にラナ専制政治が終焉すると、1960 年にネパール独自の民主主義といわれる「パンチャーヤト民主主義」体制に移行する。そこで 1962 年に新憲法が制定された。この時に Muluki Ain は中核的な法から憲法の下位にある法律の一つとなった。「民主主義」をうたうものであることから、カースト的な側面は消滅したがヒンドゥー的であり続けた。

1990 年になると民主化が達成され、新憲法が制定された。同時に、1990 年の民主主義に適合するよう、改定を重ねて今日の Muluki Ain に至る。当初の Muluki Ain に比べてはるかに薄くなったこの

法律書は、それでもヒンドゥー的な要素を多々残し、その問題は標榜していた「ヒンドゥー王国」を否定した今日に至ってもなくなっていない。

1990年以降に制定された新憲法の第七条に、牛が国の動物であることが定められている。次のようである。

第七条（国家、他）（ネパール王国憲法 第一編 予備規定 より）

（一）ネパール国家は、補則二で定める。

（二）石楠花はネパールの国花であり、真紅色は国の色であり、牛は国の動物であり、そしてラホホルスは国鳥である。

（三）ネパールの紋章は、補則三で定める。この紋章は必要に応じて拡大又縮小することができ、又その色彩は陛下の政府の定めるものを使用する。

### Muluki Ain 前文

次の Muluki Ain 前文は 1965 年に出されたものであるが、これから分るように、ネパールの社会秩序の基礎にジャート、ジャーティ（カーストと民族）がある。

聖典 *sastra* によつてのみでは、時代の影響のため、全ての行い（訴訟）がうまくたちいかないため、貴賤に関わらず、全ての人に対し、罪によつて同じ罰が与えられるようにと、余 *hamra* 偉大なる祖先、当時の国王陛下が、時の首相に命を下して出来上がり、B.S.1910 年（1853/54 年）ポウシャ月黒分 7 日より施行されてきた *muluki Ain* に、場所・時代・状況によつて、その時々増減・改正がなされてきた。全てを集め、調整し、現在の政治・経済・社会制度の観点から必要と思われるその他のことも修正し、ネパール王国において永久に平和と秩序を維持し、そして様々な階層、ジャート、ジャーティ（カーストと民族）、地域の人民の良い関係を築き置く大いなる目的で、余、ネパール国王（*shri 5 maharaj adhiraj*）マヘンドラ・ビル・ビクラム・シャハデブは、「ネパールの憲法」第 93 条により、この法律を制定し、公布する。

このような法律において、動物とネパール社会の関係を示す項目もある。次にその関係をみていくことにする。

### Muluki Ain<sup>1</sup> 動物に関する項目からみる動物とネパール社会

Muluki Ain では、人間社会において動物の位置づけがなされている。動物の中でも四足動物、そして牛の位置づけが行われ、とりわけ牛の保護に熱心であることが分る。場合によっては人命よりも優先される。また、動物との不自然なかかわりに関して女性の方が男性よりも罪が重くなることが指摘できる。具体的に Muluki Ain の第四部 7 章の子息動物についての項目から検討していくことにする。

---

<sup>1</sup> Muluki Ain 2059 Asoj（1999 年改定版）

◆第四部 7章 四足動物について choupayako pp.196-198

1. 意図して雌牛や雄牛を殺したり、殺させたり、殺そうと試みたり、そういう目的を持って国外に連れ出したり、連れ去って売ってはならない。法律で禁じられていて、なおかつ自分の権利のない別の四足動物、鳥獣を殺して損害を与えてはならない。
2. 殺す目的でなく、好意で世話をする、また無関係の状況の中で突然雌牛、雄牛の調子が悪くなったり、なんらかの理由で死んでしまった場合は、それは偶発事故とみなされる。体に出来た傷を治療するために体に傷をつけたり、焼きごてを当てたり、または体の一部から血を抜くことは出来る。
3. 代々信仰してきた神の儀礼を行う時に、雌牛以外の雌の四足動物を供犠のために殺すことは出来る。規定されているそれ以外では、何人も雌の四足動物を殺してはならない。(2055 年版削除)
4. 禁止されていると知りつつ、雌牛や雄牛を殺すという誰かが刃物や別の凶器を持って殺す準備をしているのを見た場合、殺してはならないと説得しなければならない。相手が言うことを聞かず、説得しようとした者にまで凶器を振りかざした場合、その場で切り殺しても殺した者は罪を問われない。それ以外の状況では相手を殺してはいけない。警察に引き渡さなければならない。
5. 誰かが雌牛、雄牛を刃物、または棒や石、その他の物で投打した場合、もしその雌牛や雄牛がその傷で起き上がることが出来ず、病気になって 21 日以内に死んだ場合、その牛はその傷により死んだものとみなされる。その期限を越えて死んだ場合、また歩けるようになった後に別の病気になって死んだ場合は、傷つけた者はその傷に対してのみ処罰を受ける。
6. 法律で殺すことを禁じている四足動物以外の飼育されている四足動物が、自分の農作物に損害を与えた場合でも、その動物を殺してはならない。警察署に登録して説明し、損害賠償を（その動物の）持ち主から得ることが出来る。その動物を殺傷してしまった場合、作物の弁償は受けられない。しかし雌牛、雄牛以外の動物を傷つけても責任は問われない。殺してしまったら、持ち主に弁償をした上で刑罰も科せられる。
7. 飼育している動物が狂うなどして危害を与える恐れがある場合、直ちに出来る限りそこから起こりうる様々な危険から人を守る措置をとり、注意して連れて行き、誰に対しても危害を加えないようにして飼育しなければならない。そのようにしてからも、突いたり噛んだり、または別のかたちで人を死なせてしまった時は、その持ち主は後述する法の規定に従うこととする。殺人獣を犯す四足動物の所有者は捕獲して殺し、その肉を、食べても良い動物であれば切って肉を競売にかけなければならない。その肉を食さない場合は、捨てて土に埋めなければならない。雌牛、雄牛、その他法律では殺してならないと規定する動物の場合、近くの公共の牛舎、馬小屋、象舎がある場合はそのどれかに送り、危害を加えない方法で管理し、（その旨を）通知しなければならない。家の者で動物を管理する者を殺した場合、罪にはならない。その動物の所有者はそれを捕獲し、法の規定に従わなければならない。人間以外の他の動物を殺した場合、その賠償を払い、法の規定に沿った罰則が科せられる。乗り手がいる時、象、馬など乗り手によって動かされる動物が突然危害を加えた場合、関連法に従う。
8. 去勢していない雄牛、年老いた雌牛、雄牛、また干からびた牛を国外に送り、また連れて行き、売ってはならない。何人でも売った場合、損害を補填し、一頭につき 100 ルピーの罰金を払わねばならない。国外に連れ出そうとしたが連れて行くことが出来ず途中で逮捕された場合、一頭につき

50 ルピーの罰金を支払わなければならない。

9. 何人もナンディー、または焼きごての印のつけられた放し飼いの去勢されていない牛を売ったり買ったりすることは出来ない。売買が行われた場合、売った者の売上金を没収し、刑罰が科せられる。焼きごてのしるしに気づかずに買った者は罪には問われない。
10. ネパールの国境からいかなる種類の雌牛、雄牛、ナンディーを外国に連れて行き、殺したりまたは殺させようとしたものは、6年間までの禁固刑に処せられる。
11. 知りながら雌牛、雄牛を殺した者には12年間、そして命令をした者には6年間の禁固刑が科せられる。ヤクを殺した場合は一頭につき40ルピーの罰金が科せられる。
12. 殺そうという意図を持って牛に毒を飲ませて死ななかった場合、毒を盛った者には6年間、命令した者には3年間、毒を飲ませようと思ったが未遂に終わった者には2年間の禁固刑が科せられる。
13. 殺そうという意図を持って牛を捕まえたり、縛り上げて他の人間に殺させようとした場合、6年間の禁固刑に処せられる。
14. 牛を叩いたり殴ったりして不具にした場合、2年間の禁固刑、そして傷を負わせて外傷により出血させた者には200ルピーまでの罰金が科せられる。雌のヤクを不具にした場合、または傷を負わせて出血させた者には20ルピーまでの罰金が科せられる。
15. 他人の牛を投打し、たまたまその牛が死んだ場合、その損失を補填し、損失に応じた罰金が科せられる。
16. 削除
17. 放し飼いにしている動物が、または牛番をつけているもののその牛番が見張りを怠ったがために人、あるいは四足動物をしに至らしめるほどの重傷を負わせた場合、放し飼いにしている動物が人を殺した場合、その動物の所有者、そして16歳に達して思慮分別のある牛飼いの責任であればその牛飼いに、そして16歳に達していない牛飼いの責任であれば牛の所有者に20ルピーまでの罰金が科せられる。
18. 神に捧げられた雄牛、焼きごての印のある雄牛、そして雌牛は何人も耕作に使用してはならない。耕作に適した動物を放してやり、耕作に使用した者に20ルピー以下の罰金が科せられる。
19. 牛殺しについては6ヶ月以内に、そしてその他のことについては35日以内に申し立てがない場合、無効となる。

以上の項目から、社会において牛が法的にいかに保護されているのかが分る。次は不自然な関係についての項目について検討する。

#### ◆第四部 16章 獣姦について pashu karaniko 227p.

1. 何人も四足動物の雌と性的行為をしたりさせたり、あるいはその他いかなる不自然な性的行為をしたりさせたりしてはならない。
2. 何人も四足動物の雌の中でも雌牛と性的行為をした場合、本人に一年間の禁固刑、及び雌牛以外の他の動物と性的行為をした場合、六ヶ月以下の禁固刑、あるいは200ルピー以下の罰金刑に処せられる。



3. いかなる女性も四足動物に性的行為をさせたら、本人に一年以内の禁固刑、あるいは 500 ルピー以下の罰金刑に処せられる。
4. この章の他の条目に書かれている以外の、他のいかなる種類の不自然な性的行為をしたりさせたりする者に対し、三ヶ月以下の禁固刑、あるいは 100 ルピー以下の罰金刑に処せられる。
5. この章に書かれていることに関して、該当することがあったり行ったりした日から一年以内に申し立てなければ無効になる。

この項目は、人間と動物間の性的な関係に関するものである。ここでも雌牛が特別であることが分る。

ここまで見てきたように、法的に特別な存在として牛が位置づけられ、保護されていることが分る。また、牛殺しについての刑罰は、次のように時代的な差もある。1806 年には（牛を殺したものの）「彼の背中から肉を切り取り、傷口へ塩と濃縮した柑橘の汁をすりこめ。彼にその肉を自身で食べさせ、殺せ」と定められ、1810 年には、「ヒンドゥーの土地で去勢牛を殺した極悪犯人は死ぬまで、生きのまま皮をはがれるか、串刺しにされるか、逆さづりにされるべき。彼らの財産は没収され、家族は奴隷化されるべき」とされた。そして、現在の Muluki Ain では 12 年間の禁固刑に減刑された（1990 年）。

地域的差異については、北西ネパールのフムラで飢えて子ヤクを 4 頭殺して食べた人々が罰を恐れて中国に逃げたが、それに対して 2 ルピーの罰金を払ったらネパールに戻れると伝えた例（1853 年）があり、これに対して罰則を改め、税金をとることにした。その理由は政府側も税金が必要であったことと、武器の鞘をつくるのに皮が有益だったことにある。

牛と言っても、雌牛と雄牛だけでなく、年齢によっても扱いが異なるし、人間と牛との関係も多様であることが指摘できる。例えば働く牛は、働かせるためにたたいても罰せられないが、働いていない牛は傷つけたりしたら奴隷化されるといったように、である。

## (2) ネパールにおける牛をめぐる

この報告では、ネパールにおける牛の多様性を考察することを通じて、ネパール社会を考えることを目的とする。

### カーマデーヌ

カーマデーヌとは全牛の母である。ヒンドゥーの象徴でもある。19 世紀半ば、初めてヒンドゥスタンから外に出たネパールの宰相 Jang Bahadur Rana がカーマデーヌを見上げる構図の絵が描かれたが、この構図が示すことは他にもない、ヒンドゥーの重視であった。この時からネパールではヒンドゥー化が進められ、20 世紀半ばまで公的に、1990 年まで実質的にその現象は続いてきたし、今もその延長線上にある。したがって、ヒンドゥーの象徴である牛をめぐるさまざまなことを考えることは、ネパールにおけるヒンドゥーの意味を考えるひとつの手立てともなる。

## ヒンドゥーにおける牛、牛のいる風景

小熊英二『インド日記 牛とコンピュータ』において、牛はヒンドゥーのいわゆる伝統／近代化・グローバル化の道具としてのコンピュータという構図の中でとらえられている。宗教的、伝統的、文化的な生き物であり、その生き物に対置するのは電脳、すなわちグローバル化の道具であるコンピュータであった。ネパールではどうであろうか。

8,000メートル以上の高度差のあるネパールには、多様な植生に対応するように動物相も豊かである。したがって、いろいろな牛がいるといっても不思議ではない。標高差に対応させて概略しよう。まず、ヒマラヤに分布するのは毛深くて獐猛な牛とされるヤクであり、チベット交易で活躍した役畜であると同時に可食である。次に南部低地のタライに分布するのは水牛であり、この水牛も車を引いたり、水田を耕したりする役畜であり、また可食でもある。他方、いわゆる牛はどうであるか。ネパールの首都カトマンドウの牛の多くは、セブ牛にホルスタインを掛け合わせたものであり、聖なる牛、働く牛、消費される牛となっている。少し前までは牛がカトマンドウの市街地を我が物顔で親子でそぞろ歩き、車や人やバイクが牛をよけて通行する場面を見かけたが、交通渋滞の激しい今日では、牛が道路に入り込めないように柵が設けられ、市の中心部には交通渋滞を引き起こすとして出入り禁止となった。また、近代化の進んだカトマンドウにおいて、牛が消化できないビニールなどのゴミをあさって変死することが問題化されたのもこの頃である。このいわゆる牛について、法律で保護され、他の国の象徴とは扱いが異なる。つまり、石楠花を手折っても切り倒しても法的に罰せられることはない。

## ヒンドゥー化の道具としての牛

ネパールにおいても本報告の冒頭で述べたように、ヒンドゥー化の道具、象徴として認識される牛であり、インドと同様国内政治の道具としての役割はあるが、今日それほど厳格ではない。この背景に、民族的多様性、地域的多様性が考えられる。

インドの場合、19-20世紀にかけて対外的には反英闘争の象徴として牛が掲げられてきたが、ネパールの場合、当時インド・チベットに対して政治、文化的差異を生み出すものとしてとらえられてきた。つまり、19世紀初頭にグルカ兵備兵制度が確立し、独立国として孤立、即ち国境維持の文化的役割を担うことになり、18世紀から牛に関する厳格な法律が定められていった。このように牛、つまり宗教で均質化された国土空間の創出は、ヒンドゥー王国の創出に繋がっていく。実際には、国内的に地域的差異が大きく、場所によっては牛食も容認されている。現在でも、法律における位置づけを細かく見ていくと、食べるために殺したらいけないが（事故死した牛は食べても構わない）、働く牛は叩いても罰せられないなど、牛をめぐる社会のあり方は多様である。

この近代国家創出の過程で牛をめぐる何が起こっていたのか。1740年にすでに牛を殺した場合の罰金刑定められていた。これは、ラナ・パハドゥル・シャハの反英感情から牛殺し禁止の法律は定められたとも考えられる。つまり、植民地化されたインドは牛を食べるヨーロッパ人によって支配され、その結果1857年のシパーヒーの暴動に発展していく。他方の中国では豚を食べる漢民族が優勢であったことから、政治的に孤立する必要性があり、その結果純潔性が保たれたとも考えられる。しかしながら、グルカ兵は別である。つまり1857年の暴動時、ネパール人のグルカ部隊は英国軍側に

いたからであり、このグルカ部隊の兵士達は牛か豚の獣脂をつかった菓包を歯で噛み切っていたからである。

これらのことから、イギリスに対するムスリムやインド、社会的政治的統合のシンボルとして牛が機能してきたことが分る。19 世紀において、政治的統合のための宗教的シンボルとしてネパールで利用されてきた。

## エスニシティと牛

牛と言ってもネパールにおいては多様であることは上述した通りである。実際に、国境付近の民族は牛を食べていたし、現在でも食べていると噂されている。また、都市の中産階級の人々は、外来文化として牛食を試す人もいるしグローバル化と共に国外に出て牛食の機会を避けない人もいる。また、ネパール国内の方的な監視下においても、法律における牛殺し、牛食の禁止、牛の保護などの違反を侵し、法律で罰せられるようになると中国に逃げるケースもある。

他方、ネパール北部に住む山地民族マガールは、彼らがカトマンドゥで政府と何らかの問題が生じたときに、牛を殺していたという。国家のシンボルである牛を殺すこの行為は、マガールにとって国家に対する異議申し立てに他ならない。山地民族自身は、ヒンドゥーでなければ牛食に抵抗のない民族もいる。グルカ兵のほとんどはチベット・ビルマ語系諸民族であるが、イギリスの思惑のもと、今日に至るまでヒンドゥー化政策が採られているために、ネパール国外のキャンプであっても牛食はない。チベット・ビルマ語系が 9 割弱を占めるにもかかわらず、牛肉料理は供さず、ヒンドゥーの文化維持に努めている。この一元的宗教政策は、同時にネパール語の使用を促進した。ネパール政府にとってこのような宗教政策はグルカ兵の祖国に対する忠誠心を確保するためのひとつの手段でもあった。

## グローバル化の中の牛

ネパールにおいてもグローバル化の波はひたひたと全国を覆うようになってきている。とりわけ、首都カトマンドゥにおいてはその影響も著しい。例えば、欧米の食文化が一般的ではないが、ある特定の場所に行けば経験できるし、これはエスニック料理（タイ料理、和食、韓国料理・・・）についても同様のことが指摘できる。この過程は消費文化の拡大（肉食増加、輸入食品増加）過程と連動している。在外ネパール人が滞在先で牛を食べる時に、海を渡ってネパールの牛はやってこないというような言い訳を口にするが、国内にいても、特に 2006 年 5 月にヒンドゥー王国から世俗的国家へ転換したことから、この傾向は強まるであろう。

ここでグローバル化の皮肉を指摘してみたい。先述したが、カトマンドゥをうろつく牛はセブ牛とホルスタインを掛け合わせたものがほとんどである。つまり在来種ではない。また、牛を守るためのヒンドゥー寺院パシュパティナートのすぐ近くに空港があり、そのあるゴウサラ（牛の放牧場）は牛肉を食べる人たちが上陸する場所となっている。このゴウサラは 18 世紀末、国王がパシュパティの牛に食べさせるために与えた土地であった。インドでは西ベンガル州とケララ州で不健康な牛の屠殺が認められているのだが、ドイツやイギリスへ安い牛皮革が輸出されていく。カルカッタからネパールへは牛肉が輸出され、最近ではバンコクからも運び込まれるようになってきている。国王の権力の象徴として衣装に用いられる牛皮はパキスタンから輸入されるが、いずれも飛行機で運ばれてくる。すなわ

ち、ゴウサラに到着するのである。かつては牛のため為の放牧場であったゴウサラが、今や消費の対象としての牛の玄関となっている。

地域によって、時代によって、社会によって牛との関わりは変わってくる。国としてヒンドゥーであることをやめた今日、牛と社会の関係のあり方はどうなるのであろうか。少なくともマオイストのように牛を特別視しない（特別視しないこと事態が現在のネパールでは特別視といえるかもしれない）社会が出現し、ヒンドゥーという社会の基層部分に楔を打ち込み、揺さぶっていることは確かであろう。

### 3. 竹中千春：Politics of Demography in India

当初、現代インドの政治的な現象と関係しながら、ヒンドゥー社会における動物、特に牛と人間社会の関わりについて考察を進める予定で、中間時点ではガンディー主義的な運動とガンディー思想における牛について分析を試みたが、現時点でまだ完成に至っていない。ただし、家畜という視点から人間社会を見ていく中で、生殖とジェンダー、そして動物としての人間を社会的にどう認識し管理するかという問題もまた深く関係していると考えに至った。その観点からインドの人口問題とその社会的な位置づけ、とくに政治と宗教の中でのジェンダー的な秩序と認識について分析した論文をここに掲載する。Harvard Project for Asian and International Relations, HPAIR 2005 (August 22-25, Tokyo): Plenary Session: “Points and Counterpoints: Economic Perspectives on Asian Demographics” で報告した論文をもとに『国際学研究』（2006年3月）に掲載した。

## “Politics of Demography in India”

### **The Sense of Population**

The 2001 Census of India revealed that the population of the country was 1,027,015,247 at the time, and now it is currently estimated to be 1,080,264,388 in 2005. Simply put, that is an increase of 53,249,141. At the moment India is a giant, population-wise, and it is still growing rapidly.

Whenever scholars on India try to give introductory remarks on this country, it is difficult to avoid mentioning the size of the population. Here are some exemplary descriptions, such as “Since the century will begin with Indians accounting for a sixth of the world’s population, their choices will resonate throughout the globe.” Likewise, it is very common to mention China, noting that “India is huge, it is the world’s seventh largest country covering an area of 1,268,419 square miles (3,287,782 square kilometers). It is also the second most populous nation on earth with an estimated 1996 population of over 940 million (based on the 1991 Census), against China’s estimated 1 billion, but with its population—which grows annually by 13 million, equivalent to a new Australia every year—projected to overtake China within three decades (Tharoor: 4, 10).”

For specialists in the field of Development Studies, of course, such a large population is not necessarily a bad

sign, neither for the nation nor the global society. However, the total number of people also indicates the number of people who must be fed. I can quote another typical phrase to describe populous India, mentioning the new economic policy of the early 1990s, “Despite this, overall growth was relatively slow, and not generally better than in the pre-liberation 1980. (With the population still increasing by about 2 percent a year, per capita growth is decidedly unimpressive.) (Tharoor 1998: 172)” The amount of GNP or GDP is in inverse proportion to the population of the country.

Therefore, the prospects for this country cannot be seen as solely optimistic. “India has an economy ranked as the tenth largest in the world in terms of currency conversion and fourth largest in terms of purchasing power parity. It recorded one of the fastest annual growth rates of around eight percent in 2003. Owing to its large population, however, India’s per capita income by purchasing power parity works out to be just US\$3,262, which is ranked 125th by the World Bank (Wikipedia, 2005: India).”

These discourses of population are more than clichés in India and abroad: India might be a large country of 1 billion people, but she is crowded with miserably poor people. While the Indian economy is rapidly growing, her society is still very much underdeveloped; and while India is not like OECD countries like the United States or Japan, it is also different from East Asia economies such as China, Korea, Taiwan, and other main ASEAN countries. However, it is possible that good news will surface soon relating to the contemporary talks on BRICs in the global economy, or regarding a new candidacy for a position as a permanent members of the United Nations Security Council from Asia.

Now I would like to stop mentioning the typical discourses on the “problems” of population in India. In the following pages, as a political scientist studying this country, I would rather like to raise a few points which interest me regarding demographic studies. My arguments might not be tentatively irrelevant in the framework of Development Studies, for example, but I hope that they will link the specialists of demography to other areas of studies for some possible joint research on India and Asia in the age of globalization.

### **Discipline of Good Rulers**

According to the encyclopedia, population is defined as “the collection of people—or organisms of a particular species—living in a given geographic area.” Furthermore, “Population is studied in a wide variety of ways and disciplines. In population dynamics, size, age and sex structure, mortality, reproductive behavior, and growth of a population are studied. Demography is the study of human population dynamics. Other aspects are studied in sociology, economics, and geography (Wikipedia 2005: Population).”

Excluding other species, population is the “collection of people.” But what kind of a collection? How are the people collected? By whom, when, and why? The phrase “living in a given geographic area” also conditions the word collection. Who determines this geographic area and when is it determined? Why and how? Does this

“collection of people” exclude other non-geographic collections of people?

In asking naïve questions like these, we come to understand that the definition of population carries some obviously political connotations. “Collection of people” implies community, society, and the nation, and a “given geographical area” implies administrative and political units of land. Therefore, although we do not find political science in the relevant disciplines of demographic studies, demography seems deeply related to the political phenomena: state, territoriality, borders, population, nation, community, local society, and so on. It presupposes the government of modern states as its operational apparatus.

We can read the *Indian Census in Perspective* (1971) with its basic introduction of the history of the Census of India. The author’s argument begins to persuade the reader that India itself had an indigenous history of the Census, which is a typical way of explaining early nationalists. “In India some 3,000 to 7,000 years ago there were people in possession of technology sufficiently advanced to support a dense population.” He even quotes a sentence from the earliest Indian literature, the *Rigveda*. Since then, rulers developed their ways to determine the local population, especially at the time of Chandra Gupta (321-297 BC) and Ashoka (274-236 BC). “The celebrated *Arthashastra*, the Principles of Government, were written by Kautilya, one of the greatest geniuses of political administration, during the days of Mauryas in 3 BC, and prescribed the collection of population statistics as a measure of state policy for the purpose of taxation.” Akbar the Great of the Moghul period followed later (Ibid.).

“However, the population counts, the importance of which was so well recognized in the ancient days of good government were neglected during the medieval period when the history of the country was also somewhat disturbed” (Ibid.). Through this the author implies that when the government was good, rulers were conscientious about performing the population counts, but when a good government was lacking, they did not do anything like that. After the great age of the Moghul until the establishment of the colonial government, there was a dark age of the Census, as it is defined by the author.

Then, the British came to rescue India from this chaos. “But again with the system of modern government developing, the need for a fairly accurate account of the population was felt. For obvious reasons, such as defense, the collection of revenues and taxes, and the employment of the population in profitable trades and services, the East India Company was anxious, soon after the Restoration in England, to obtain reliable estimates of the population in its Indian settlements” (Ibid.).

He introduces an early case, saying, “Moreland, the famous historian, estimated the total number of Indians in 1600. For numerical basis of calculation he based his studies, in the south, on the strength of the armed forces and in the north on the land under cultivation on both of which subjects contemporary figures were available. Indirect estimates had been made, for example, of Fort St. George, Madras, for 1639 and 1648 by comparing

revenues in 1639 and 1648, and for 1649 by adding reported famine deaths of 1647 to the estimate of 1648” (Ibid.).

Efforts continued around the forts of Calcutta, Bombay, and Madras, but the “unsettled condition of the country following the disintegration of the Moghul empire did not offer favorable conditions for systematic estimates of population” (Ibid.). Not only that, but British officials of the Company did not have modern technology and administrative institutions sufficient enough to do this Census job in the early 17th century, i.e., before the Industrial Revolution.

However, following the first Census of 1801 in England, Systematic Censuses of Presidencies were edited in the 1820s and 1830s. British officials produced various census books based on the administrative units, which means that the institutions of government had to continue to administer the region. “It will be seen that within a period of 20 years the population of this Presidency has been counted more or less efficiently on five occasions, and it becomes no cause for surprise that the fifth counting should have involved no more political anxiety to the government than any of the former enumerations” (Ibid.).

The good will of the Government of India, however, did not reach to the frontier regions so early. “The northern provinces were not so fortunate.” The North-Western Provinces took their census in 1852 under G. J. Christian, and it is interesting to note that J. D. Sim’s Scheme of quinquennial censuses for Madras was based on the North-Western Provinces’ scheme of 1850. The N.W. P. Census of 1852 “was a regular house to house numbering of all the people in the province at one fixed time—viz., the night of 31 December 1852” (Ibid.). The North-Western Provinces refers to the North-Western States of India beyond Delhi, and covers the main area of Pakistan today. Since the British military could not acquire the administrative control of the region until the mid-19th century, there was no statistical information edited for census data.

Such a history of the Census in India embodies the country’s particular experiences as a modern state and the social formation under the state. One of the imminent scholars on Indian political history says:

The impact of the colonial state and its various institutions on Indian society came into its own in the early 19th century. After suppressing a widespread civil revolt in northern India during 1857 and 1858, the British established their dominance officially by making Queen Victoria monarch of India. The 19th century saw a massive state project undertaken by a small group of British officials to enumerate, classify, and thereby control a quarter of a billion Indians (van der Veer: 18-19).

Partha Chattajee, another well-known historian, proposed a new concept, the “colonial state as a modern regime of power”. The British government in India established a modern state in India, though it was exactly opposite to a sovereign nation state. He quotes from the closing remarks of the book, *Rise and Fulfillment of British Rule*

*in India*, written by Edward Thompson and G. T. Garratt, both highly respected liberal historians in Britain, being sympathetic to Indian nationalism.

Whatever the future many hold, the direct influence of the West upon India is likely to decrease, But it would be absurd to imagine that the British connection will not have a permanent mark upon Indian life. On the merely material side the new Federal Government. (based on the 1935 Government of India Act)... will take over the largest irrigation system in the world, with thousands of miles of canals and water-cuts fertilizing between 30 and 40 million acres; some 60,000 miles of metalled roads; over 42,000 miles of railway, of which three quarters are State-owned; 230,000 scholastic institutions with over 12 million scholars; and a great number of buildings, including government offices, inspection bungalows, provincial and central legislatures. The vast area of India has been completely surveyed, most of its lands assessed, and a regular census taken of its population and its productivity. An effective defensive system has been built up on its vulnerable North-East frontier, it has an Indian army with century-old traditions, and a police force which compares favourable with any outside a few Western countries (Chatterjee: 14-15).

We can see the combination of colonial ‘good government’ with the Orientalist approach in the above quotation. The census signifies not only numbers, but also the dominant structure of perspectives, knowledge, and information of the colonial state.

### **Demographic Profiles in Politics**

If we see the operation of the Orientalist perspective of British officials in the methods and concepts of census editing, the Census was not just data reflecting the reality of colonial society. In fact, it represented the government itself in its control of local populations; the pair of glasses would determine what you would see in reality. Van der Veer explains, “In this project categories like caste, religious community, and race were variously applied, but two elements are of particular importance: the collection of data on caste and the division of the population into religious communities (van der Veer: 19).”

First, we can see the categorization along caste lines. “The census operations, begun in 1872 to collect facts about the population of India, made use of a classification of endogamous groups—castes—ranked in a hierarchical order. This classification was derived from classical Hindu texts, but the census operations succeeded in making it contemporary reality.... Caste society did exist before the colonial period, but the census operations did much to make caste divisions more rigid and to encourage the application of all-India categories. This resulted in the enhanced importance of caste in dealing with the state and led to the emergence of caste associations (*sabhas*)” (Ibid.: 19).

Next is religion: “The division of the Indian population into religious communities was an aspect of colonial thought from the beginning. When the British sought to apply indigenous law, they made a clear-cut division



between 'Hindu' and 'Muhammedan' law. This conceptual division was further institutionalized in the census operations, which established a Hindu 'majority' and a Muslim 'minority' that in turn became the basis of electoral, representative politics (Ibid.: 19).

The term, 'divide and rule', was used to designate the characteristic policies of British rule in India. The British took advantage of and manipulated the population by categorizing them into various conflicting groups. They did not say that there was an Indian people; it was always said that there were 'Indian peoples.' The British did insist that India itself could not be integrated without the good government of British rule. The issue for us is not simple criticism of the old imperialism but, as van der Veer described, the function of the colonial state which established the relationship between the state and people in a unique way.

Independent India did not choose to have separate electorates for 'Muslims' and 'General' (people other than Muslims) as the British defined them in several Government of India Acts in the 20th century. But she did not give up a similar system. The Constitution of India has articles to protect the right of representation for the outcastes and tribal peoples. They are given new constitutional names such as the Scheduled Castes (SC) and Scheduled Tribes (ST). They call themselves SC & ST in public discourse, though SC could be replaced by *Dalit* (the most oppressed people) to refer to themselves favorably. This is an Indian way of institutionalizing affirmative action policy, which is known as reservation.

Therefore, discrimination against the lower castes became unconstitutional. Interestingly, SC & ST survived as new administrative categories of castes, though officially categorizing people by castes became politically incorrect. The methods and concepts of the Census should follow these new rules, and have not differentiated population by castes since independence.

On the one hand, the reservation system has been functioning as the means of separation within the local community and politics since it categorizes people into clearly different social groups. On the other hand, it has also been functioning as the means of integration, owing to the merit of distribution of social resources and political opportunities to the people most discriminated against in the society. The Indian National Congress, the party of the founding fathers of India, used to be in the center of power as a predominant political organization, which could keep its electoral base not only in the land-owning elite classes, but also among SC & ST, thanks to the reservation system. In other words, the latter groups were reserved as vote-banks for the power-holders.

However, people who belong to the middle strata in the socioeconomic hierarchy, began to turn their backs to the Congress since the mid-1960s. They supplied the main voters for the anti-Congress opposition in many states based on policies of ethnicity, language, and other local commonalities. Although Indira Gandhi, the young leader of Congress, tried to oppress those oppositional forces by enforcing a state of emergency, the splinters of old-nationalists from the Congress, like Morarji Desai, allied with various regional groups

representing lower classes under the banner of *Janata* (people). In 1977, after two years of emergency rule, Indira stepped down from the power owing to defeat in the general election, and the first non-Congress government of the Janata Party was established. Looking back from our current perspective, this was the beginning of dynamic caste politics in Indian democracy.

In the early 1980s, the so-called Mandal Commission Report was published to propose a new reservation system for the lower classes other than SC & ST. These were named the Other Backward Classes (OBC) in legal terms, a name which sounds interesting in itself. When the non-Congress parties, supported by the electorate composed of the main OBC groups in the states, held power in the state governments, they tried to protect and promote their interests and social opportunities. You could say the traditional social order has been challenged in various ways in local politics. However, it could be pointed out that the new interest politics of majoritarianism, nepotism, and corruption arose from this. Various regional OBC-backed parties flourished in the 1980s and 1990s, and this tendency characterizes the multi-party system in India to this day.

Another legacy of the colonial policy of 'divide and rule' is concerned with the religious communities. The largest minority has been categorized as Muslims, though there are other minorities such as Christians, Sikhs, Buddhists, Parsis, and Jews. Historically, the Muslim population varied in the context of local society, reflecting the history of conversion, immigration, military conquest, state-making, and so on. Of course, various Islamic sects co-existed besides the difference of class, social strata and occupation, ethnicity, language and the like.

However, the British administration presented a simple classification: Muslims and non-Muslims. The political representatives of the Muslim population were organized, thanks to the separate electorates, and they constituted their own political space, interests, organizations, and ideas under British rule. Such a divisive tendency was strengthened in the last stage of decolonization, which resulted in the final partition of the sub-continent into Pakistan as an Islamic state and India as a multi-religious, secular state.

Owing to the historical process of nation-building, the Muslim population in independent India were not given the separate electorate or the constitutionally reserved system of affirmative action which the SC & ST successfully acquired. The final decision by the British authority to split the population between Pakistan and India was based on a ridiculously simple principle of demography: if the majority of residents are Muslims, then the district will go to Pakistan; if the majority are non-Muslims (Hindus and Sikhs), then it will go to India. It was mathematics in colonial Census; suddenly the number became crucial. To constitute the majority of Hindus, the upper-caste Hindus had to make a concession to outcastes as well as tribal people living in hilly tracts, especially in the frontiers of the northeastern borders between India and Pakistan. Compared to SC & ST, the political position of Indian Muslims was not good at all. They were legally Indian nationalities, but not fully admitted by the Hindu majority as their fellow citizens. They were supposed to be Muslims first and, therefore, possibly friends of Pakistan.

As long as the Indian National Congress reigned in power, however, its political leaders tried to keep the political umbrella covering all social groups, including the SC & ST and the Muslim minority, while maintaining the leadership of the upper-caste. But, as previously mentioned, the supremacy of the Congress was challenged in the mid-1960s, and the end of the predominant party system of the Congress came in the late 1970s and 1980s. Such a change in politics brought about different situations for different social groups.

In the early 1980s, anti-SC riots often happened in Bihar and Gujarat, reflecting the frustration of young, upper-caste Hindu students. They were angry with the discrimination against the upper-caste students for the college entrance examination, especially at the medical college, and the distribution of scholarships.

Furthermore, since the mid-1980s political discourse gradually turned against the Muslim minority. Reacting to the transnational movements of Islamic Fundamentalism, the Hindu radicals expressed their anxiety with their own archaic religious movements. In the late 1980s and early 1990s, the popular *Hindutva* (True Hindu) movement could organize big demonstrations such as *Ayodhya yatra* (pilgrimage), finally culminating in the demolition of Babri Masjid and the bloody massacre of Muslims on 6 December 1992. Reflecting such a political mood, the Baharatiya Janata Party (BJP), which was backed by the Hindu Right (RSS) group, ascended to become a national party. In the general election in 1996, the BJP became the single largest party and held office for 13 days. In March 1998, it won again and this time succeeded in building a coalition with the main regional parties to govern in the center.

The modern way of categorizing population was transplanted by the British officials with scientific methods of statistics in the 19th century. Additionally, as other nationalist ideas and institutions followed in the steps of the colonial rulers when they designed a scheme of nation states, the ideas and institutions of modern census-making were also transferred to Indian elites. However, the categories of caste and religion have survived for another 60 years, thereby reflecting the political experiences during the period of decolonization.

When we analyze Indian politics today, caste and religion are two essential idioms to understand what is going on in parliament, state legislature, and each constituency. Even bribes and political crimes could not be understood without categorizing people in caste and religion. For example, one of the cabinet ministers of the Congress-led coalition government, Laloo Prasad Yadav, who is also one of the Members of Parliament (MP), is categorized as representing the Yadav community, one of the major OBCs in his state of Bihar. So, even if he is too well-known for corruption and nepotism, he can still be very powerful and popular. Why? Because majoritarianism in democracy works as an advantage for caste politics. He is also well-known to hold a secular policy toward the Muslim community. Of course, you can say that he is a good-minded politician, but in reality electoral politics necessitates such tolerant stance. He should get the support from Muslim voters in some constituencies numerically.

In any case, caste and religion construct politics of election, politics of representation, and politics of alliance. At the same time, they also construct politics of competition, politics of oppression, and politics of confrontation. In India in the 1990s and 2000s, various violent attacks against minorities were caused mainly by organized Hindus. Sometimes these attacks were targeted against *Dalit* (SC people), forest tribes, the Muslim minority, or rural Christians. Amazingly, the Hindu Right uses the terms of the Census as effective rumors in riots: Muslims have been doubling the population to threaten the Hindu population, for example, or the population of Christians has been rapidly growing. The population threat became an ideology to kill the men and children of the communal enemy and to rape and murder their women.

Therefore, it is often said that the politics of demography works to decide the verdict of general elections in India, meaning that the electoral result resembles the population data of the Census to categorize the population. It also works to vitalize politics of violence, along with the rising popular movements. While colonial rulers used the Census for its own sake, the postcolonial state and its main political actors tend to use other features of the Census to their advantage.

### **Floating People: Urbanization and Globalization**

Lastly, I would like to mention briefly the other limit of Census and demography which is concerned with the definition “the collection people in a given geographical area.” If people move beyond the given geographical area, how could the Census grasp such people correctly? This is, I suppose, one of the oldest agendas of census-making, but also one of the newest issues in an age of vast numbers of internal and external immigrants in the world.

The process of urbanization has been facilitated for decades, and India is no longer a village country. More than 30 percent of the population lives in cities, and immigration into urban areas is increasing—people go to large metropolitan cities for education, jobs, and other aims. They will find their dwellers in unauthorized residential areas, the so-called slums of cities. On the other hand, the mobility of people to rich OECD countries and Gulf countries is continuously increasing. The network of oversea Indian diasporas is not a minor thing in the Indian political economy. For example, the annual amount of financial resources sent back to the homeland is huge, the speed of information circulation is amazing, and the ideas of diasporas are re-imported to India. Those factors also encourage religious fundamentalism in India.

Therefore, how will studies of demography recognize such new phenomena? Will they come to be seen as transformation or deconstruction of scientific methods and concepts? Especially in light of the fact that those were invented to deal with collections of people in a given geographical area in the 19th and 20th centuries. New methods and concepts might be necessary for the demography in the 21st century. In short, what could be the idea of “population” in the age of a globalized market?

India has a population of 1 billion and an economy that is transnationally active. How are these phenomena to be understood? The *Nihon Keizai Shimbun* recently had a special report on the issue of population, and I was asked the following questions by one of their journalists: Is India a new economic giant in the 21st century Asia? Could India constitute a threat to Japan population-wise? What about the world's largest English-speaking, well-trained cheap labor in India? Do they continue to supply a large portion of the labor force for the global IT industry? Yes, those are all interesting questions, but probably more so for investors and entrepreneurs in global markets. The Indian-educated middle-class will supply an effective work force for the out-sourcing needs of global companies in the US, Europe, Japan, and other developed countries.

But as a political scientist, my attention is drawn to the people who are insignificant or invisible in global markets. The Indian agricultural sector produces only a quarter of her GNP, yet the poor majority have to earn their livelihoods in this sector. Even within the agricultural sector itself, the gap between the productive sector and unproductive sector is large. Therefore, the inequality between the rich and poor has never been bigger in postcolonial India than it is today. That means that a huge portion of the population live outside of good governance and, as such, lack law and order and sufficient social services. Some of them have to live in deserted peripheral areas, tense zones of violent criminal activities or civil war. Escaping from such unlawfulness and sheer poverty, they choose to live in slums in metropolitan areas as newly arrived migrant laborers.

In such a divisive world, the scientific devise of census-making could be, of course, an instrument of police enforcement or counter-insurgency military forces. Further than that, when the Hindu Right was assertive in power, information concerning census and voters' lists were reportedly used for targeting minorities in riots. But the ideas and technology of the census could be developed as a new instrument of governments in order to make a positive intervention in society. I would like to ask the specialists on perspectives of the 21st century demographic studies whether the demographic studies will first find a break-through, or whether political changes will necessitate a new form of demography?

## Reference

*Indian Census in Perspective* (1971),

<http://www.censusindia.net/census2001/history/censushistory/html>

Partha Chatterjee, *The Nation and its Fragments: Colonial and Postcolonial Histories* (Princeton: Princeton University Press, 1993)

Chiharu Takenaka, "Between Globalization and Democracy: Indian Politics Today," *Kokusai Mondai, (International Affairs)*, No. 542 (May, 2005) [in Japanese].

Shashi Tharoor, *India: From Midnight to the Millennium* (New York: Harper Perennial, 1997)

Peter van der Veer, *Religious Nationalism: Hindus and Muslims in India* (Berkeley: University of California Press, 1994)

Wikipedia (2005),

<http://en.wikipedia.org/wiki/Population>

#### 4. 竹尾茂樹：日本におけるヤギ飼育の変容

##### はじめに

戦中期から戦後にかけて日本の食糧事情が劣悪であった時期に、主として農村部の栄養源としてヤギ乳が注目されて増産されていた<sup>1)</sup>。その後 1961 年の農業基本法の制定によって日本の農業の生産構造は劇的な変化を遂げる。農業の近代化に伴い、畜産業においては経済家畜としての牛、豚、鶏の飼育が主流になる。一方でヤギ飼養頭数は 1950 年に 41 万頭余り（沖縄県を除く）、1957 年には 67 万戸による 66 万 9 千頭が飼育されていたのをピークに漸減する。飼育の形態は 1973 年頃までは 1 戸あたり平均 1 頭であったのだが 1989 年には平均 2.9 頭まで上昇し、広く薄く飼育されていたものが特定農家に偏って飼育されるようになった。また飼養の用途は乳を中心とした自家消費型から肉用・実験動物用としての飼育へ変化する。牛乳・乳製品の普及、食糧事情の好転、さらには経済成長下の農業経営基盤の変化によって、こうした変化がもたらされたと思われる。

農水省の「畜産統計」も 1997 年を最後に独立した項目としてのヤギの扱いをやめている。最後の全国統計によれば飼育数は 8,500 頭、生産農家は 5280 戸であり、頭数で見ると 10 年間で実に 100 分の 1 に減少したことになる。日本の農村風景からヤギは近い将来にその姿を消すのだろうか？

この研究では 1990 年代からの日本におけるヤギ飼育の変化と文化史的な意義に注目した。この間にヤギ飼養の見直しが少しずつだが行われはじめ、また若干の飼養頭数の回復が見られる。その理由の主なものは次のとおりである。1) ヤギ乳への関心・再評価。組成が母乳に近く、牛乳アレルギーをもつ乳幼児・病弱者の摂取がしやすい。牛乳に比べて脂肪球が小さいため。2) 学校教材としての採用・ペットとして導入。3) ヤギの粗飼料<sup>2)</sup> 利用性の高さから、遊休農地等の草刈り利用などに向いていること。事例として長野県立北佐久農業高校家畜部ヤギ班が実習・研究用に飼育するシバヤギ 10 匹を佐久市内の園地や上越高速道の斜面などで放し飼いにし、除草に役立っている。九州西部原産の肉用小型種は粗放な管理にも耐え、餌の入手や飼育の手間が省けるメリットがあるという。

酪農農家の現状を見ると、多頭数飼養型の経営をめざした限界がしばしば指摘される。特定種（ホルスタイン牛など）に特化した生産システムによって、経営規模を拡大し大量消費型の酪農経営を行うことになった。その結果北海道・東北地方など草地酪農地帯にありながら、もっぱら購入濃厚飼料に依存する飼育形態が一般化した。また近年は環境にかかわりふん尿処理の問題が取り上げられることも多い。

こうした日本の畜産環境の中で、マイペース酪農への転換の試みも行われている。すなわち大規模草地化・多頭飼育型から、森林と共存する中・小規模の経営形態への転換である。こうした環境変化において、ヤギ飼養の組合せが注目されている。たとえば根室山羊組合（北海道）が 2003 年に設立されヤギ 31 頭の試験導入がされた。あるいは中標津いぬい牧場では 175 頭（うち搾乳ヤギ 44 頭）が導入されている。根室山羊組合の目標は次の通りである。

- 1) ヤギを飼育し、ウシ酪農家にヤギ飼育を勧奨する
- 2) ヤギ乳を搾乳し、乳製品を製造・販売する
- 3) ヤギ肉の製品を開発・製造・販売する
- 4) ヤギ乳乳製品、ヤギ肉製品の地域ブランド（特産化）をはかる

ヤギ飼育のメリットとして、飼育管理が比較的に容易であること、乳・肉の利用の可能性があるこ

などがある。現代農業の課題とされる中山間地域の振興策として、また資源循環型農業の一環として一つの大きな可能性をもっているといえるだろう。

### 沖縄におけるヤギ飼育の特徴

沖縄地方は戦前から伝統的にヤギ飼育が盛んであった。1930年の統計によれば、人口1000人当たりの飼育数は244頭に及び、全国平均の3.37頭を圧倒している。ブタ飼育が盛んであることは知られているが、その飼育数は同年に211頭/1000人、全国平均は11.6頭であった。1997年度の畜産統計によれば、飼養戸数は全国の42%（ついで鹿児島県25%、これに長野県・岩手県・群馬県がつづく）、飼養頭数は沖縄県49.3%（鹿児島県20.3%）、屠殺頭数は（95年度に沖縄県61%、鹿児島県29%）、枝肉生産の割合も同様である。こうして見ると沖縄地方は現在においてもヤギの飼養と消費において際立っていて、一種独立したヤギ文化圏を形成していることがわかる。

沖縄では「肉」といえば豚肉のことを指す。1950年代まで一般庶民にとっての豚肉は、盆や正月、結婚式や家の新築などの大きな祝祭日にしか食べられない特別な料理であり、貴重品であった。盆正月には隣近所10軒程度で、1頭の豚を屠殺・分配し料理に利用した。今日でも年間14.2kg（1997年度）の個人消費は日本一である。しかしそれを補完するものとしてヤギの飼育と消費の規模の大きさにはこれまであまり注目されて来なかった。

沖縄へのヤギの伝播については、フィリピンのムスリムの飼育していたものが台湾経由で渡ったといい、また尚巴氏が1430年代に中国からの進貢の際に琉球農民の体位向上の為にもち返ったものが広まったという説もあるが定説はない。史料の初出は『成宗実録』（1477）に「馬とヤギは沖縄島のみに見られる」とある。なぜ沖縄においてヤギが飼育され、また需要が大きいのだろうか。その理由をまとめると、

- 1) 伝統的な根強いヤギ肉嗜好が存在する。薬膳（クスイムン）としての需要は依然高い。
- 2) 新築祝い、出産祝い、合格進学祝い、選挙事務所開きなどの振舞い料理としてヤギ肉料理がよくつかわれる。これは沖縄島中・北部に盛んな習俗である。県内100店舗といわれるヤギ料理店が仕出しも請け負っている。
- 3) 他の家畜に比べて飼育が簡易であること。

病気が稀れ、女性・子供・老人も世話が可能。また気候風土に対する抵抗力が強く寒帯から亜熱帯地域まで飼育が可能である。飼料は野山や庭先の草、木の葉、木の皮。ワラ、野菜クズ、オカラなど粗飼料の中の「未利用資源」のみで濃厚飼料・購入飼料を必要としない。子ヤギの購入・ヤギ小屋建設が安価・簡便であり、またふん尿は肥料として菜園・花卉栽培等に再利用できる

ヤギの食肉は、農繁期の滋養強壮食（薬膳）、家の棟上式、親類縁者の親睦・懇親会、小さな祭りや集まりなど個人や地域レベルの祭りで消費されるようであり、伝統的な祭祀において使われる例を見ていない。屠殺も各家庭で行っていたのだが、1972年施政権の返還以前には「屠畜場法」<sup>iii)</sup>の適用外であったものが、適用を受けるにいたって個人の屠殺は禁止される。しかし山や河原等で個人や仲間間で処理してきた伝統から、密殺は未だに根絶されず、不完全な精肉処理により食中毒も発生しがちである。公設の屠場の不足（沖縄本島においては現在南部に1か所）も問題であろう。近年はヤギ乳利用のザーネン種の導入など試みられているが、枝肉は需要に追いつかずニュージーランドなどが

ら輸入して捕っている。多良間島や勝山（国頭）においてヤギによる村おこしも企てられ、ヤギ利用復活のヒントは沖縄地方にあるかも知れない。

### 全国山羊サミットの開催と今後の動向

宮崎県北諸県郡山之口町出において 1998 年「人の暮らしと山羊とのかかわりを考える」テーマで第 1 回全国ヤギサミットが開かれた。ヤギ乳の健康食品としての価値、雑草管理における利用、商品生産と自給生産の併存の重要性、ヤギによる教育効果など、ヤギを飼うことの意義を多角的に扱う催しであった。以後、沖縄・愛知・北海道・長野・茨城・群馬・福島・岩手において 9 回を開催。1999 年には全国山羊ネットワークが設立され、生産者農家をはじめ、加工業者、研究者などが情報交換を行っている。「山羊を生産のための家畜と限定せず、役用家畜、伴侶動物、実験動物など汎用家畜として位置づけて山羊の価値をアピール」するという。

FAO の統計によると、世界のヤギ飼養頭数は年々増加しており、1997 年の総頭数は約 7 億頭で、その 95% はアジア、アフリカおよび南アメリカに分布している。アジアでは、中国、インド、パキスタン、バングラデシュ、イランの順に頭数が多く、開発途上国においてむしろ増加している。これは人口の爆発的増加や飢餓難民の増加に伴う食料不足により、牛・豚に比べて得やすい蛋白源であるヤギの需要は減少していない。

日本における農業や畜産の近代化や消費者の食文化そのものの変化といった環境に対して、今日ヤギ飼養のあり方やその需要と消費の形態はさらに変化するであろう。沖縄地域をはじめとして、新しいヤギとのかかわり方が模索されていると言える。伝統的に存在してきた飼養方法や食習慣にくわえて、新しい飼育の形や利用方法を探ることはきわめて今日的な課題であるといえるだろう。

### 注

- i) 我が国に於ける乳用山羊の飼育は近年頗る普及発達して来たのであるが、今日の盛況を観るに至った所以を考えると他の家畜の場合とは異なった理由が存するのである。例えば乳用山羊の飼育の盛んなこと全国の双壁と言われる長野、群馬の両県の実情に付て観るに山羊は他の家畜が農業用家畜として飼育せられるのとは異なって、従来主として養蚕地方又は山村に於ける栄養、保健の為という見地から、農家の自覚に基づいて自発的に飼育して来たものである。即ち山羊乳は農山村に於ける育児用として、また一般人の栄養補給用として欠くべからざる必需品となっておるのであって、この事実は正に農山村の生活やその保健衛生等を論ずるものにとって厚生上見落とすことのできない事柄であると思う」村上栄『山羊詳説』（pp.1-2、養賢堂、1941（昭和 16）年）
- ii) 農産廃棄物として稲わら、モミガラ、芋づる、野菜くずなど、林産資源としては、ポプラ・カンパ類等の早生広葉樹、桑枝条、ササ類、代採跡地の残腐材など。原料資源として利用可能成分の濃度が低く、大量に収穫しても使える部分が少なく、搬送も困難。
- iii) 「この法律で『獣畜』とは、牛、馬、豚、めん羊及び山羊をいう。何人も、と畜場以外の場所において、食用に供する目的で獣畜をとくつてはならない。」

### 5. 橋本 肇：生殖補助技術の変遷と将来

生殖補助技術（ART=Assisted Reproductive Technology）の利用は、基礎科学として受精現象・初期発生の段階的解明、水・畜産分野での応用として高品質・大量生産による食生活への貢献、不妊カップルに対しての妊娠の手助けを含む生殖医療など、基礎的な研究から応用分野までの多岐にわたって



いる。

このような生殖現象への人為的介入は、1720年、イヌの人工授精の報告に始まる。

1952年には、精子の凍結保存の成功、並びにクローン・カエルの作出、1978年には、ヒト体外受精児の誕生、1997年には、体細胞からの核移植によるクローン動物（ドリー）の作出などがあり、近年哺乳動物のクローン作出が多く報告されている。

年	事	項
1720	犬の人工授精、初めての動物生殖現象への人為的介入	
1890	ウサギによる受精卵移植・胚移植	
1939	アメーバによる細胞質の入れ替え	
1949	牛による過剰排卵誘起が開発	
1952	液体窒素による精子の凍結保存が可能となる	
1952	クローンガエルの作出、哺乳動物核移植技術の原型	
1959	ウサギによる体外受精の実験が開始	
1961	哺乳動物によるキメラの作出	
1970	カエル体細胞によるクローンオタマジャクシの作出	
1971	液体窒素による卵子の凍結保存が可能となる	
1978	ヒト体外受精児の誕生	
1981	クローンマウス作出（*データ捏造による虚偽の論文発表）	
1981	ES細胞（胚性幹細胞）の体外培養の確立	
1982	ラットの成長ホルモン遺伝子を持った「トランスジェニックマウス」の作出	
1985	トランスジェニックのブタ及びヒツジの作出	
1986	イギリスで哺乳動物の核移植技術が開発	
1997	体細胞からの核移植によるクローン動物（ドリー）の作出	
1997	クローンマウス作出	
1997	トランスジェニックのクローンヒツジ（ポリー）の作出	
1998	日本で初めての胚細胞クローンウシの誕生	

現在、各分野で研究・利用されている技術を簡単に紹介すると、ホルモン剤投与による卵胞発育・排卵誘発（過排卵処理）、配偶子の凍結保存、人工授精、体外受精、顕微授精、X・Y性染色体を有する精子の分離と雌・雄個体の産み分け、受精卵・胎児の体外培養、借り腹（代理母）など、多くの技術や方法が考案され利用されている。

現在、米国を中心に精子銀行から精子を購入し、人工授精を行い、子供を育てるいわゆるシングル・マザーが増えている。しかし、近い将来、これらの技術だけを考えるならば、精子銀行や卵子銀行ができ、体外受精、代理母或いは胎児体外培養との組み合わせによる営利企業が進出し、シングル・マザーに限らずシングル・ファーザーの出現、核移植によるヒトES細胞の売買利用、

対象物	技術
卵子	卵胞発育
配偶子	排卵誘発
	人工授精
	体外受精
	凍結保存
精子	凍結保存
	X・Yの分離
受精卵	凍結保存
	分割
	多胎児の防止
	体外培養
	核移植
	借り腹
胎児	妊娠期間の調節
	体外培養

更にはヒト・クローンの同時複数の作出ということも考えられる。

この様なことに関して、最も重要なことは、医学や生物学の面からだけでなく、倫理・哲学・宗教・文化・法律等の人文社会的側面からも幅広く十分に検討していくことである。

※本報告書は国際学部附属研究所共同研究「家畜と人間社会」の最終報告書である。